

校長室通信

令和 7 年 10 月 9 日号

志免町立志免西小学校

高良 祐治

夏休みが終わり、1 ヶ月半が過ぎようとしています。しかし、校庭の木からはまだツクツクボウシの声が聞こえてきます。最高気温が 30 度を超える日もあり、子どもたちも先生も「今日は外で遊べるのか？」と熱中症指数にとらめっこの毎日です。昭和世代の私が子どもの頃とは明らかに気候が変わってきています。子どもたちが大人になったとき、どのような環境になっているのでしょうか。

まだ、〇年生ではない

今日は、前期の終業式でした。2 学期制の本校では、後期の終わりは修了式となるため、終業式は年に 1 回しかありません。

久しぶりに全校が体育館に集まった終業式で、私は子どもたちに、「あなたは何年生ですか？」と問いかけました。子どもたちは「なんで今更そんなことを？」と不思議そうな顔をしていました。そこで、次のようなお話をしました。

「ちょうど 1 年の半分が終わりました。1 年生は入学して半年、3 年生は 2 年と 2 分の 1 年、6 年生は 5.5 年です。だから、例えば 5 年生は、正確に言うと、『5 年目生』です。ここに集まっているのは、1 年目生から 6 年目生までの西っ子ということになります。」

「本物の〇年生になるためには、残りの半年を、しっかり学び、遊び、友だちと仲良くして成長する必要があります。」

子どもたちにうまく伝わったかどうかはわかりませんが、後期の修了式では、「第〇学年の課程を修了したことを証する」と書かれた修了証を子どもたちに渡します。ここで初めて「私は〇年生」と言えるのだと思います。

そもそも現在日本では、「満年齢」による数え方をしています。昔は「数え年」といって、生まれたときを 1 歳として元旦に加齢をする方式が一般的でしたが、明治 35 年の「年齢計算ニ関スル法律」以降は、生まれた時を 0 歳とし、誕生日で 1 歳加齢していく「満年齢」で年齢をカウントしていくようになりました。

この考え方からみると、1 年生は正確には 0 年生なのかもしれません。でも、「1 年生になったら」の歌を「0 年生になったら～♪」と歌うのは変だし、あまりうれしさを感じないので、やっぱり今のままでいいと思っています。

残り半年をどう過ごすか

話が横道に逸れてしまいましたが、私が子どもたちに伝えたかったことは、この半年間の自分自身の成長や課題をしっかりと見つめ、残りの半年の目標を一人一人がしっかり持って後期を迎えてほしいということです。

朝起きて、時間割に従って学校生活を過ごし、夜になって眠る毎日を過ごしていると、毎日が淡々と過ぎていきます。朝ご飯や各教科の学習、夕方の習い事や宿題などが、決められたルーティンとして「当たり前の日常」として日々過ぎていきます。

このような日々を過ごしていると、国語の新出漢字や算数の公式を使った計算など、覚えていることやできるようになったことは増えていくのでしょうか、「あれ、どうしてだろう？」「やってみようかな」「挑戦してみよう！」という一念発起するような心に灯がともることや、「最近、〇〇に取り組んでいるんだ」「こうしたらうまいくかな」「何とかやり遂げたい」という粘り強さの発揮や、「やり遂げた！」「うまいくなかった、悔しい！」「もう一回！」という充実感やレジリエンスが見られることはないと思います。

子どもたちに、「前期、夢中になったことはありますか？」と問いかけてみていただきたいと思います。これは、ある 45 分間の授業のような短い時間の中にあるかもしれないし、総合的な学習や委員会活動など、長い期間の取り組みの中にあるかもしれません。また、長編小説に挑戦した読書かもしれないし、全国大会を目指した習い事かもしれません。

もし、「新しいゲームソフトで、難しいステージをクリアすることに夢中になっているよ」「スマホで面白い動画を探すのに夢中！」といった答えしか返ってこないようであれば、ちょっと寂しいですね。

15 日から始まる後期、本物の〇年生になれるように、夢中になって毎日を過ごしてほしいと思います。